よい子

エレーナ・ズドルニク（訳・村野克明）

ヴィクトル・アレクセーヴィチと来た日には、何事かにチャレンジしてそれが未達成のままの場合、心の底では、漠然とした苛立ちと自己不満との感情がわだかまるのだ。ましてや今回は、ずいぶんと昔に企てたにも拘わらずそうした体たらくなので、何をか言わんや、であった。では、何ゆえに、ずるずると延ばしてしまったのか。その理由としては、最初は、時間が全くなかったからであったが、それよりも、ばたばたと着手することをご本人が望まなかったのである。

生涯、ヴィクトル・アレクセーヴィチは軍務に就いていた。遠隔地で、駐留軍から駐留軍へと転々とし、大佐の階級まで勤め上げた。晩婚であり、年金生活に入る前にモスクワに住み着いた。

予備役に回された時、異常な喜びを覚えた。いよいよ自己の計画を遂行できるからだ。もしも軍隊式に公式化するなら、「計画」ではなく、「任務」となろう。この任務こそ、具体的なものであり、言うまでもなく一定の努力と時間の消費とを要するのだが、とにかくやりおおせなければならなかった。最初、思い描いたように。

そう、何事も「最初」が肝心。そう、全く、そうなのだ。何となれば、とうの昔に入念に検討した二〇項目からなるリストを（頭の中から）紙の上にアップし、項目ごとにその探索を始めるや、その途上で或る障害が出始めたから、である。あたかもピーク時のモスクワの道路の渋滞のような、克服のむつかしい、障害が。

最初に見つけた本の状態は申し分なかった。このことは異常にヴィクトル・アレクセーヴィチを喜ばせた。その他の本はそれほどの喜びを全く与えなかったけれども。さて、探索には三か月ほどかかった。インターネット古書店サイト、リアルな古書店、がらくた市の古本コーナー、読書に無関心な人々が遺産として入手した蔵書類など、手あたり次第、あくせくと探し回った。

必要な二〇冊の書籍のうち、『ロビンソン・クルーソーの冒険』ソ連版が最後まで障害となったのである。二〇〇〇年代、今はやりの言い方だと、ゼロゼロ年代となるが、その初めの時分、書店には本が洪水のようにあふれていた。だが、そうした本どもはヴィクトル・アレクセーヴィチの関心を惹かなかった。必要なのは、まさに、子供の頃に親しんだのと同じ本だからだ。当時と同じ装丁、同じ挿絵の本がほしい。

遂にその日がやってきた、待ちに待った日が。その前夜、ヴィクトル・アレクセーヴィチは妻に通告した、明朝のダーチャ〔主に夏用の別荘〕行きはおじゃんになった、と。妻は驚愕し、鼻に皺を寄せて、「どうしてなの？」「よんどころない用事が持ち上がったのさ」この言い分は妻を満足させなかった。昨日まではおくびにも出さなかったくせに、実際問題、夫の身にどんな不可抗力が降りかかったというのか。

ヴィクトル・アレクセーヴィチは思った、妻の不満はもっともだ、と。昨日の昼まではこちらとしても思ってもみなかったことなのだ。だが、到頭、やり終えたのだ、長年の懸案を。すなわち、昨夜になって、遂に買い上げたのである、あの『ロビンソン・クルーソーの冒険』を。これは、モスクワ中のすべての古書店の棚をほじくり返した成果だった。まさに当時と同じ版、ソビエト版で、表紙には朱色の地に黒のシュロが描かれている。この版は大変な稀覯本とは言えない。だが、ここに至るまで、同じ版を何冊も購入しては、「老朽化」の状態ゆえにその都度「不良品」としてハネてきた経緯がある。こうした辛酸の果てに見出した今度の版は、新刊本のように見えた。ああ、なんと多くの月日が流れたことか、それが今もこの新しさを保っているとは。こうして、リストの最後の項目が埋まった。

「レンガでも入ってるんですか?」と、郵便局員がぶつくさ言う、小包の目方を量りながら。「一〇キロ越えたら、何か取り除いてくださいよ、でなかったら違う窓口へ持ってってください。ここでは、一〇キロまでしか扱ってませんので」

「取り除くって、どうやって?」とヴィクトル・アレクセーヴィチは興奮し出す。「あのねえ、どうしても一つの小包に全部入れて送らなければならないんだが」

郵便局員は電子計量台の数字を観察する。

「お喜び申し上げます、重量はパスしましたよ、九キロと、九七六グラム、です」

ヴィクトル・アレクセーヴィチは背中に羽が生えたかのように自宅に舞い戻った。あたかも、長く苦しい登山行動の果てに平坦な場所に息を切らせてたどり着き、その場でしばらく息を継いでいる、といった感覚を覚えた。今や、待つのみ、となったのだ。ヴィクトル・アレクセーヴィチには全く自信がなかった、何を待てというのか。だが、最も肝心なことを成し遂げたのだ、という幸せな思いで心が一杯になったのである。

ダーチャへ向かう道中、ヴィクトル・アレクセーヴィチと妻とは、もちろん、厭うべき渋滞に巻き込まれた。「利口な人たちは夜も明けないうちに出掛けるものよ、モスクワ中がお目覚めになるまでわざわざ待ってたりはしないわ」と妻がぶちまける。ヴィクトル・アレクセーヴィチはこの口論には関わらない。割に合わないことは避けるに限るからだ。

義務を果たしたという感覚、これはあたかも肩の重荷が抜けたようだ。その夜は、安らかに眠られた。こんなことは長い間、初めてのことだ。おまけに、夢を見ることにもなった。幼い頃、親の家にいて、ハンモックに寝そべり、いつも何かの書物を手にしている自分が、見える。

……ヴィーチカ〔ヴィクトルの愛称〕はしん底、本を読むのが好きだった。無人島でのクルーソーの冒険、巧妙な犯罪に対するシャーロック・ホームズの捜査、華麗に復讐を遂げるモンテ・クリスト伯の天賦の才能、――こうした本たちを、とめどもなく、むさぼり読んだ。主人公たちの平坦でない人生行路、その激変する運命の波に

さらされるのは、主人公と共にあるこの自分もそうなのだ。その都度、そんな思いを新たにしたものだ。

片時も本を手放すことができない自分。食事中も、バスでの学校の行き帰りも（全部でバス停四つで下車しなければならなかったが）本を手にしていた。授業中も膝の上に本を開き、ひそかにページをめくっていた、女性教師が黒板へと向きを変える瞬間を捉えて。

少しでも文学と何らかの関係を有する大人の人たちからは熱愛されたものである。女性教師からは、文学の公開討論での最も責任あるスピーチを任され、「作文」の授業では常に「優」の評点が下された。児童図書館では数えきれないくらいの本を読んだ。そこの館長のルフィーナ・ゲオルギエヴナからは「ヴィーチェニカ」〔ヴィクトルの愛称〕と呼ばれ、お気に入りの閲覧者となった。ルフィーナは、その他の若い閲覧者たちに向かって「ヴィーチェニカを模範として励みなさい」と檄を飛ばし、ヴィーチェニカのために新規納本分のすべてを取り置いたりしたのである。

その頃から多くの歳月が流れた……。ルフィーナ・ゲオルギエヴナはとうの昔に年金生活者となっているだろうが、ルフィーナに続いて、二番目にえらい、たぶん、二番目に、だったんだろうが、あの、もうちょっと若い司書の女性は何と言ったっけ？　どうしても名前が思い出せない。

……一方、ヴィクトル・アレクセーヴィチが遂にその名前を想起できなかった、遠方の居住区の児童図書館の当の女性司書の方は、まさにモスクワから届いた小包に、驚倒の思いだった。その居住区ではこの女性の名前は知れ渡っていた。だから、小包の箱の宛名が「児童図書館館長さま」とだけで他には何も記されていなかったにせよ、無事に届けられたのである。小休止を挟みつつ重たいその箱を書庫のそばまで引きずってくるや否や、ゾーヤ・ペトローヴナは好奇心に駆られて、梱包用テープを切って小包を開けてみた。上部には、密封書簡が一通、載せられていた。あわやそれもこじ開けようとしたゾーヤだが、突如、その封筒の宛先欄に「ルフィーナ・ゲオルギエヴナ様」と書かれているのが目に入った。そこでその封筒は脇に置き、この女性は箱からその中身を取り出し始めた、二〇冊の書物を、一冊、一冊と。

「おやまあ、これは一体どういうことかしら。スヴェータ〔スヴェトラーナの愛称〕、ちょっとこっちへ来てくれない」と、閲覧室の司書を呼んだ。

「ゾーヤ・ペトローヴナ、どうしちゃったの？」と、スヴェトラーナが館長室を覗き込む。万事ティーンエージャーの癖の抜けない痩せぎすの女性だ。

問題の箱を目にし、スヴェトラーナはもっと顔を近づけた。

「へええ、おどろき桃ノ木サンショの木ね。古本屋の所でしかお目にかかれない版ばかりじゃないの。どこから手に入れたの？」

「ほら、小包で送って来たのよ」

「いったい誰が、何のために？」と、スヴェトラーナは驚愕と狼狽とを意味する、骨ばった両肩の小刻み運動を始める。まるで人形遣いによって操られているように。

「私、何にもわからないわ」と、当惑してゾーヤ・ペトローヴナは答える。「だけど、ルフィーナ・ゲオルギエヴナ宛の手紙も入っていたの。それが謎を晴らす手がかりになるかもしれないわね。私、いますぐルフィーナに電話してみる」

館長はそらで覚えていたナンバーを掛けた。受話器のブザーの長い響きが聞こえる間、ゾーヤは封筒を手にして長椅子に座り込んだ。

「こんにちは、ルフィーノチカ〔ルフィーナの愛称〕、お変わりなくて？」

ゾーヤは質問し、笑い声を上げ、返答に耳をすます、相変わらず不安げに、ちらちらと封筒の方を眺めながら。何のための電話なのか、なかなか言い出す決心がつかなかった。だが、健康、天気、孫たちとあげつらった挙句、ゾーヤ・ペトローヴナは咳を一つすると、ついに切り出した。

「ルフィーノチカ、あなたに手紙が来ているの」

「てがーみぃ？」と驚いてルフィーナ・ゲオルギエヴナは語を伸ばす。「誰から？」

「私の理解する限りでは、あなたお気に入りの閲覧者からだわ。思い当たらない？」

「ヴィーチェニカからかい？　もうずいぶんと昔、ばったり来なくなった。両親が死んで、それっきりさ。読んでくれないかい、何が書いてあるか知りたいので」

「封筒には封がしてあるの」と、ゾーヤ・ペトローヴナは告げる。

「かまわないから開けてくれていいよ、私には秘密なんかありゃしないから、さあ、読んでおくれよ」と、じれったそうに、ルフィーナ・ゲオルギエヴナは求めた。

ゾーヤ・ペトローヴナは封筒の上端を切り開くと、ノートブックからまるまる切り取ったと思われる紙一枚を取り出した。そこには、のびのびとした筆致で、こう書かれていた。

「親愛なるルフィーナ・ゲオルギエヴナ、私は長い間、あなたにこの手紙をしたためる決心がつかずにいました。おそらく、あなたはすでにだいぶ以前に年金生活に入られたことでしょう。が、この手紙があなたに渡るものと期待しております。私にとって、このことはきわめて重要なことだからです。この封筒は、書籍を入れた小包に同封しました。その書籍とは、かつて私があなたの児童図書館から卑劣にもこっそりと盗んだのと同じ書籍なのです。私は今もあなたに対して恥ずかしい。あなたは私を同年輩の者たちの模範生として立ててくれ、お気に入りの閲覧者である、と言ってくださった。今も覚えているのは、私が図書館の入り口に姿を見せるや、「ああ、私のお気に入りさん、いらっしゃい！　ヴィーチェニカ、こっちへいらっしゃい」と、あなたが言ってくださったことです。ところがこのヴィーチェニカはあなたの信頼を利用して一冊、一冊とセーターの下に隠して持ち出していたのです。後生ですから、こんな私をお許しください。私は同じ本を探し出しました、いや、もちろん同じとは言えませんが、同じ刊行年、同じ装丁のものではあります。なぜか私にとって、まさに同じ本であることが重要に思われたので

す。もちろん、これは幻想にすぎません。まるで、当時お借りした本を今、返却したかのようになってしまいました。お許しください、返却が長期間、遅延してしまったことを。敬具。ヴィクトル・アレクセーヴィチ・K」

ゾーヤ・ペトローヴナは口を閉ざした。朗読中、黙って座っていたスヴェトラーナだが、まつ毛をしば叩くと、

「ああ、私、びっくりしたあ！」と遂に、声を挙げる。

「しい、静かにして！」と、底から響くような囁き声で館長はスヴェトラーナを制すると、受話器に向かって言う。

「ルフィーノチカ、聞いてる？　どうして黙っているの？」

「噛み砕いて、理解しようとしてるのさ」と、ルフィーナ・ゲオルギエヴナが弱い声で応じる。

「あのね、ルフィーノチカ、なんてわるいことだろう！　なんという卑劣漢だろう！　ところがあなたは……あなたはどのくらい、こんなヴィーチェニカを褒めちぎっていたことだろう！　私、覚えているわ、みんながわるくても、ヴィーチェニチカだけはよい、とあなたがおっしゃってたことを」

「馬鹿なこと言いなさんなよ」と、断固として、ルフィーナ・ゲオルギエヴナが断言する。「みんながわるくとも、なんて私は言わなかったよ。だが、ヴィーチェニカは本当によい子だ」

「ルフィーナ、あなた正気なの？　窃盗行為を告白した相手なのよ。自分でほら、ちゃんと書いてある、白地に黒で、はっきりとそう明記してある。それに、あなた自身、あの当時、無くなった本のことでは、ずいぶんと不愉快な目に遭ってたじゃないの。何んとか報告しなければならず、抹消登録の措置もせざるを得なかった。新刊書を抹消登録するとはなんて嫌なことだったろう。しかも、どれもほとんどまだ読まれてもいない本ばかりだった。それでも、あなたには、ヴィーチェニカはよい子なの？」

「うん、よい子だ」

「私にはあなたがわからないわ、ルフィーナ！」と、いらいらしながらゾーヤ・ペトローヴナは受話器に向かって大声を出す。

「私が今、そう言ったのは、盗みのことではないよ、ゾーヤ」とルフィーナ・ゲオルギエヴナはため息をつく。「あんたにわからなければ、ま、仕方ない。それよりか、ヴィーチェニカの返信用アドレスを書き取らせてもらえないかね」

（了）

【補記】

●原題（ロシア語）……　Хороший мальчик　（よい男児）

●出典……　Елена Здорник - Цветок с коротким стебельком. Рассказы о жизни и любви. М, 2019 г.　エレーナ・ズドルニク著『茎が短い花　人生と愛の短編集』、モスクワ、二〇一九年刊。

●著者……　現代ロシアの女性作家兼シナリオライター。沿海州地方の都市型居住区キーロフスキー（人口約八千人。ウラジオストクから北に三百キロ）出身。一九八七年ウスリー教育大学卒。二十年間、地元でロシア語・ロシア文学の教師を勤める。その後モスクワの全ロ国立映画大学卒。現在、モスクワ在住。

●なお、先に、同じ著者の『小品四編』（拙訳）を、福島みゆき氏が編集長の名田島お茶の間通信『せせらぎ』第八号（二〇二一年刊）に掲載させてもらった。

●本編の登場人物の呼称について……　主人公の「ヴィクトル・アレクセーヴィチ」も「ルフィーナ・ゲオルギエヴナ」も、「名＋父称」の言い方である。「父称」とは父親の名から形成される。よって上記の場合は、「父アレクセイの子ヴィクトル」、「父ゲオルギーの娘ルフィーナ」を意味する。ただし、こうした語結合を日常会話で用いる場合には、たんに「～さん」を意味する。職場で「田中さん、これこれをお願いします」という場合の「田中さん」の言い方（敬称）に該当する。ただし、本編では「姓」が、出てこない。「ヴィクトル・アレクセーヴィチ・K」と一カ所、略称の「姓」の「K」があるばかりだ。これに反して、「名」のみの言い方が本編のあちこちで登場する。「ヴィクトル」とその愛称形の「ヴィーチカ」、さらに親しげな「ヴィーチェニカ」。そして、「ルフィーナ」とその愛称形の「ルフィーノチカ」、である。これもさらなる親密さを表す。ロシア人同士では「名」のみ、とくにその愛称（本編の「ルフィーノチカ」などのように）でのみ呼び合う。その際、往々にして、相手の「姓」を知らないか、忘れているかする。昔の日本ではどこの家にも表札が掛かっていて、そこに「姓」が明記されていた。ロシア人の集合住宅などでは、そうした表札は一般的には存在しない。蛇足だが、安倍元首相が会見の度にプーチンを「ヴラジーミル」と「名」のみで呼ぶことができたのは、おそらく、事前にプーチンの許可を得ていたからだろう。もっとも、ロシア語学習者でないと「ヴラジーミル・ヴラジーミロヴィチ」（名+父称）ではやけに長ったらしく、舌が回らないかもしれないが。

●本編では愛称はロシア語表記そのままを訳した。このやり方については、松下裕氏が「ロシア人の姓名について」（チェーホフ『子どもたち・曠野　他十篇』〔岩波文庫〕所収）で示した方針を参照した。

●ソ連版『ロビンソン・クルーソーの冒険』について……　本編のヴィクトル・アレクセーヴィチが苦労して探していたのは、以下の版だと思われる。デフォー著『ロビンソン・クルーソーの冒険』（英語からの露訳）、「冒険文庫」叢書、モスクワ、「冶金工業」出版所、一九八二年刊、三二八頁。ハードカバー。「朱色の地に黒のシュロ」の表紙の映像については、以下のサイトを参照。

https://coollib.net/b/184121-daniel-defo-zhizn-i-udivitelnyie-priklyucheniya-robinzona-kruzo

●ダーチャ（主に夏用の別荘）……『ロシア・ソ連を知る事典』（平凡社、一九八九年刊）の「ダーチャ」の項によれば、「ダーチャは週末の息抜きの場であるばかりか、都市住民にとっては劣悪な食料事情を自前の野菜・果物生産で補う大事な場でもある。週末になれば屋根に荷物を満載したマイ・カーで郊外への道路は混雑する」とある。なお、ブログ「談話室＝水源地」での美水正一氏の書き込みをも参照のこと。キイワード「ダーチャ」「別荘」でご検索を。

●本編（拙訳）を、わが学生時代に札幌大学図書館に勤務していた女性職員の皆様に捧げます。私はヴィクトル・アレクセーヴィチではありませんけれども。

（二〇二三年七月二十六日、擱筆）